

臨床看護師の行う「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化 －仕事に対する思い・仕事の仕方の側面から－

滝島紀子¹⁾

要 旨

本研究は、「看護研究」体験後1年を経過した看護師ならびに「看護研究」体験後1年を経過した看護師が勤務している病棟師長を対象に、臨床看護師の行う「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化を仕事に対する思い・仕事の仕方の側面から明らかにした。

その結果、臨床看護師の行う「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化として、仕事に対する思いでは、「看護に対する思い」「看護援助に対する思い」「患者に対する思い」「チームワークに対する思い」「業務改善に対する思い」「自己研鑽に対する思い」、仕事の仕方では、「看護援助の仕方」「思考の仕方」「自己表現の仕方」「チームワークのはかり方」「仕事に対する取り組む姿勢」「自己研鑽の仕方」、看護師のみは「患者・家族へのかかわり方」などが明らかになり、「看護研究」体験は、研究の成果だけではなく、看護師として成長する機会にもなることが示唆された。

キーワード：臨床看護師 看護研究 仕事に対する思い 仕事の仕方

I はじめに

「病院で取り組まれている看護研究についての全国的な調査は見当たらないが、A県の全数調査では、84.1%の病院は看護研究に組織的に取り組んでおり、多くの病院が看護研究に組織的に取り組んでいるものと推察される¹⁾」と言われてるように、昨今は、多くの病院で看護研究が行われている。

このような状況において、看護研究を行った看護師からは、「看護研究を行う前よりも考えるようになった気がする」「看護研究を行った後は同僚と一緒に考えることが多くなった」など、看護研究を行う前後での何らかの変化を聞くことがある。

そこで、「看護研究」を行ったことによる看護師の仕事上の変化を知る目的で病院で行われている看護研究に関する先行研究をみると、看護師の看護研究支援に関するもの²⁾³⁾、看護研究における看護師の体験に関するもの⁴⁾、看護研究の推進に向けた教育のあり方に関するもの⁵⁾などはあったが、「看護研究」を行ったことによる看護師の仕事上の変化

に関する研究はみあたらなかった。

このような実状を受けて、今回は、「看護研究」体験後1年を経過した看護師ならびに「看護研究」体験後1年を経過した看護師が勤務している病棟師長を対象に、臨床看護師の行う「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化を仕事に対する思い・仕事の仕方の側面から明らかにしたのでここに報告する。

II 研究目的

臨床看護師の行う「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化を仕事に対する思い・仕事の仕方の側面から明らかにする。

III 用語の定義

看護研究：臨床看護師がグループで行う看護という現象における疑問に対する探究

IV 研究方法

1 対象

300床以上の総合病院で、研究協力が得られた3病院に勤務する看護師80名（臨床で「初めての看護

1) 川崎市立看護短期大学

研究」体験後1年を経過した看護師)、ならびに病棟師長20名(臨床で「初めての看護研究」体験後1年を経過した看護師の勤務している病棟師長)

臨床で「初めての看護研究」体験後1年を経過した看護師とした理由は、「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化が生じるのは、「看護研究」体験直後ではなく、1年ぐらい経過してからではないかと考えたからである。

2 期間

平成27年1月10日～27日

3 方法

自作の質問紙(無記名自記式)による調査。調査紙は、病院の看護部宛に郵送し、看護部に研究対象として該当する看護師ならびに病棟師長への調査紙の配布を依頼した。回収は、看護部から調査を依頼された看護師が、調査紙に添付した封筒にて自分の意思で回答・返送する方法を用いた。尚、調査の依頼にさいしては、研究の主旨と個人情報保護されることを書面で説明した。

4 内容

「看護師の調査」は、『看護研究』体験が及ぼす仕事上の変化」は、「学習は手段－目標関係の認知構造ないし認知地図が成立することであって、それは直ちに実行行動となってあらわれるとは限らない。したがって、行動面に特別な変化がみられなくても、経験を通じて潜在的学習が生じている可能性がある⁶⁾」という概念を活用し、看護研究を行った看護師が認識する仕事に対する思いと仕事の仕方の変化をみた。また、「病棟師長の調査」は、看護研究を行った看護師が認識する仕事に対する思いと仕事の仕方がより客観的になるよう病棟師長が認知する看護研究を行った看護師の仕事に対する思いと仕事の仕方の変化をみた。尚、調査紙に対する回答は、下記の各項目の有無については二択、「有」の場合はその内容を自由記述形式で記載という方法を用いた。

<看護師の調査>(看護研究を行った看護師が認識する変化)

- 1) 最終看護基礎教育機関(看護大学、看護専門学校、看護短期大学、その他)
- 2) 「看護研究」を行う前後での比較において、「看護研究」を行ったことが影響していると思われる

仕事に対する思いの変化の有無(「有」の場合は、その内容)

- 3) 「看護研究」を行う前後での比較において、「看護研究」を行ったことが影響していると思われる仕事の仕方の変化の有無(「有」の場合は、その内容)

<病棟師長の調査>(看護研究を行った看護師に対する病棟師長が認知する変化)

- 1) 「看護研究」を行う前後での仕事に対する思いの比較において、「看護研究」を行ったことが影響していると思われる変化の有無(「有」の場合は、その内容)
- 2) 「看護研究」を行う前後での仕事の仕方の比較において、「看護研究」を行ったことが影響していると思われる変化の有無(「有」の場合は、その内容)

5 分析方法

看護師・病棟師長いずれにおいても、二択の場合は単純集計、自由記述においては、看護研究を行った看護師の仕事に対する思いの変化・仕事の仕方の変化についての記述を一単位とし、その意味が損なわれないように留意し、コード化した。この過程において、意味の理解が困難な3つの記述を除去した。その後、コード化したものの類似性・相違性に着目して比較検討を行い、カテゴリーを抽出した。この一連の分析過程は研究者が繰り返し行い、分析結果の妥当性の確保に努めた。尚、分析終了後は第三者に分析結果の確認を依頼し、より分析結果の妥当性を確保できるよう努めた。

6 倫理的配慮

データを研究目的以外には使用しないこと、調査紙は無記名であるため個人は特定されないこと、研究終了後は確実にデータを廃棄すること、調査紙に添付した封筒での調査紙の返送は自由意志に基づくものであり、調査紙の返送によって研究への同意とみなすことを文書で記した。尚、本研究は、川崎市立看護短期大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号 R43-1)

V 結果

1 対象の概要

看護師を対象とした調査紙の回収数は38、回収

率は47.5%であり、回収数38の内訳は、看護専門学校卒業36、看護短期大学2であった。また、病棟師長を対象とした調査紙の回収数は14、回収率は70%であった。

2 看護師の結果

看護研究を行った看護師が認識する「看護研究」体験前後での仕事に対する思いと仕事の仕方の変化は以下の通りであった。

1) 看護師が認識する「看護研究」体験前後での仕事に対する思いの変化(表1)

「看護研究」体験前後での仕事に対する思いに変化があったと回答した看護師は38人中27人(71%)であり、コード数は29、カテゴリーは「看護に対する思い」「看護援助に対する思い」「患者に対する思い」「チームワークに対する思い」「業務改善に対する思い」「自己研鑽に対する思い」の6つ、「その他」としては、「疑問に思うことや新しいことを試してみようとしたとき、看護研究をしてみようと思うようになった」であった。

表1 看護師が認識する「看護研究」体験前後での仕事に対する思いの変化

N = 27(複数回答)

カテゴリー	コード
看護に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・看護を突き詰めたいと思うようになった ・看護を深めていきたいと思うようになった ・「看護援助を行う」さいに「看護」を意識するようになった ・看護についてもっと学んでいこうと思うようになった ・看護の専門性を高めようと思うようになった ・看護は常に流動的で変化しているものだと思うようになった ・1つの考えや組織の縛りにとらわれず、「看護師として」考えていかないといいと思うようになった
看護援助に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が行った研究に関連する援助に関心をもつようになった(2) ・研究で明らかになった内容を看護援助の改善に活かそうと思うようになった ・日々行っている看護援助に対してで「これはなぜだろう」と疑問をもつようになった ・エビデンスを意識するようになった(2) ・根拠を意識するようになった(3) ・数字というデータを意識するようになった ・1つひとつの援助の必要性を意識するようになった
患者に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・患者さんがどのように思っているのかを意識するようになった ・患者さんの思いに関心をもつようになった(2)
チームワークに対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダーシップ、メンバーシップを意識するようになった(2) ・メンバーの時は「リーダーが困らないようにしよう」と思うようになった
業務改善に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・業務改善をしようと思うようになった ・病棟で行われている業務の改善を図ろうと思うようになった
自己研鑽に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・文献を読んだり、専門書を読んで知識を得ようと思うようになった ・研修に参加してもっと学ぼうと思うようになった
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・疑問に思うことや新しいことを試みようとしたとき、看護研究をしてみようと思うようになった

2) 看護師が認識する「看護研究」体験前後での仕事の仕方における変化(表2)

「看護研究」体験前後での仕事の仕方に変化があったと回答した看護師は38人中31人(82%)であり、コード数は39、カテゴリーは「看護援助の仕方」「患者・家族へのかかわり方」「思考の仕方」「自己表現の仕方」「チームワークのはかり方」「仕事に対する取り組み姿勢」「自己研鑽の仕方」の7つ、「その他」としては、「いままで見過ごしていたなかに必要な看護援助のあったことが

わかるようになった」であった。

3 病棟師長の結果

病棟師長が認知する看護研究を行った看護師の「看護研究」体験前後での仕事に対する思いと仕事の仕方の変化は以下の通りであった。

1) 病棟師長が認知する「看護研究」体験前後での仕事に対する思いの変化(表3)

「看護研究」体験前後での仕事に対する思いに変化があったと回答した病棟師長は14人中11人

(79%)であり、コード数11、カテゴリーは「看護に対する思い」の1つ、「その他」としては、「看護に対する自信がつく」であった。

2) 病棟師長が認知する「看護研究」体験前後での仕事の仕方における変化(表4)

「看護研究」体験前後での仕事の仕方に変化があったと回答した病棟師長は14人中10人(71%)

であり、コード数は34、カテゴリーは「看護援助の仕方」「思考の仕方」「自己表現の仕方」「チームワークのはかり方」「仕事に対する取り組み姿勢」「自己研鑽の仕方」の6つ、「その他」としては、「まとめ方が上手になる」「文章表現がよくなった」「カンファレンスがうまくできるようになった」などであった。

表2 看護師が認知する「看護研究」体験前後での仕事の仕方における変化

N = 31(複数回答)

カテゴリー	コード
看護援助の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 根拠を意識して行うようになった ・ 根拠を考えて看護援助を行うようになった (3) ・ 学生指導において、看護ケアの必要性や根拠を伝えるようになった ・ 根拠のある観察ができるようになった ・ 丁寧なケアを行うようになった ・ 研究結果を実践に活かすことができるようになった ・ 研究領域に関しては、研究結果を意識してかかわるようになった (4) ・ 研究結果を意識して援助をするようになった ・ 考えてから患者に援助をするようになった ・ 考えながら援助を行うようになった
患者・家族へのかかわり方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 伝えたいことは何かを意識して患者さんとかかわるようになった ・ 患者さんの話をよく聞くようになった ・ 自分が話すより、人の話を聞くことが多くなった ・ 患者さんはどう思っているのかを訊くようになった ・ 入院前の生活や退院後の注意点を一緒に確認するようになった ・ 患者や家族への対応の選択肢が広がった ・ 患者さんへのかかわりが積極的になった
思考の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 物事を焦点化して考えられるようになった ・ さまざまな視点から考えられるようになった ・ 患者の問題点に対する要因をアセスメントするようになった ・ アセスメントができるようになった ・ アセスメントが深められるようになった (2)
自己表現の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の意見を周りに伝えられるようになった ・ 積極的に意見を言うようになった
チームワークのはかり方	<ul style="list-style-type: none"> ・ リーダーの時は、スタッフへ配慮することができるようになった (2)
仕事に対する取り組み姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・ 看護は決められたことを行うのではないと思うようになり、看護に対する関心や楽しみをみつけることができるようになった ・ 研究領域に対する仕事に自信がもてるようになった (2) ・ 仕事に対する責任感や自分の立場を考えるようになった
自己研鑽の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 疑問に思うことは調べるようになった ・ 関心のあることについての研修を受けるようになった
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ いままで見過ごしていたなかに必要な看護援助のあったことがわかるようになった

表3 病棟師長が認知する「看護研究」体験前後での仕事に対する思いの変化

N = 11(複数回答)

カテゴリー	コード
看護に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 看護に対するやりがいをもつことができる ・ 「看護っておもしろい」という思いをもつことができる ・ さらに看護を深めていきたいという強い気持ちをもつようになる (2) ・ 看護とは何かを考えるようになる (3)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 看護に対する自信がつく (4)

表4 病棟師長が認識する「看護研究」体験前後での仕事の仕方における変化

N = 10 (複数回答)

カテゴリー	コード
看護援助の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経験だけに頼らず、客観性を重視するようになる ・ 看護実践をいかに可視化するかを考え、行動するようになる ・ 根拠を大切にようになる ・ 自分のみならず、スタッフの根拠も促進するようになる ・ 研究関連の仕事は丁寧に行うようになる (4)
思考の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視野が広がる ・ 多角的にみることができるようになる ・ ものごとを順序立てて考えられるようになる ・ 注意深く観察ができるようになる
自己表現の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の意見を人に伝える力がつく (2)
チームワークのはかり方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究によって自信をもち、リーダーシップを発揮することができる ・ 研究を進めていくうえで養われたリーダーシップ、メンバーシップが発揮される ・ スタッフディスカッションを大切にようになった ・ スタッフで語り合い、協力する風土ができた ・ スタッフとの一体感がうまれた
仕事に対する取り組み姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仕事上の課題を考えるようになった ・ 問題意識をもって看護に取り組むようになった ・ 前向きに積極的に仕事ができるようになった ・ 自信をもって仕事ができるようになった ・ 仕事が効率的になった ・ 仕事に対して前向きになった
自己研鑽の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 勉強会、学習会に参加するようになった (2) ・ 文献をみるようになった (3) ・ 学習への関心をもつようになった
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ まとめ方が上手になる ・ 文章表現がよくなった ・ カンファレンスがうまくできるようになった

VI 考察

臨床看護師の行う「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化について「看護研究」体験前後での仕事に対する思い・仕事の仕方の側面から考察していく。

1 「看護研究」体験前後での仕事に対する思いにおける変化

表1と表3から明らかなように、「看護研究」体験前後での仕事に対する思いにおける変化で看護師・病棟師長に共通していたカテゴリーは、「看護に対する思い」であった。「看護に対する思い」は、看護をさらに深めていきたいと思うようになる、看護とは何かを改めて考えるようになる、看護に対する奥深さを感じるようになるなどの変化であり、「看護を極めていきたいという思いがより強くなる変化」といえることができると思われる。このような変化は、「実践的研究では、研究を計画する段階から、どのように現実にかかわるかということが、確かになっていなければならない。……こうしたことを考えると、研究テーマ、問題意識が、その社会における看

護の現実とどのようにかかわっているかを、たえず現実検証することが必要になるのである」⁷⁾といわれているように、看護研究は現在行っている看護実践と切り離すことはできないため、看護研究によって現在行っている看護実践を改めて振り返ることになり、この振り返る過程におけるさまざまな思いが現在行っている看護に気づききっかけとなり、このような気づきをきっかけとして「看護に対する思い」に変化が生じるのではないかと考える。

次に、看護師の仕事に対する思いの変化にのみあったカテゴリーについてみていく。「看護援助に対する思い」は、看護援助の根拠を意識するようになる、看護研究で明らかになった知見を看護援助に活かそうと思うようになるなどの変化であり、「根拠に裏づけられた看護援助を提供していきたいという思いがより強くなる変化」といえることができると思われる。このような変化は、「看護研究とは、看護という現象に焦点を当てて行う研究である」⁸⁾「(研究とは)疑問に答えたり、問題を解決したりす

るために、組織だった科学的方法を用いて行う系統的な探究である⁹⁾といわれているように、看護研究とは深く追究して看護という現象の本質や真相をつかむことであるため、看護研究によって研究テーマについての本質や真相を明らかにしたという体験が、普段行っている看護援助の根拠の重要性に気づくきっかけとなり、このような気づきをきっかけとして「看護援助に対する思い」に変化が生じるのではないかと考える。

「患者に対する思い」は、患者の気持ちに思いを馳せるようになるという変化であり、「患者の気持ちにそったかわりをしようという思いがより強くなる変化」ということができると思われる。このような変化は、特に研究が患者の意識・認識・認知などに関するものである場合に、文献検討段階、データ集約段階、論文作成段階など研究のあらゆる段階において今まで想像したことのない患者の思いに気づくきっかけがあり、ここでの気づきをきっかけとして「患者に対する思い」に変化で生じるのではないかと考える。

「チームワークに対する思い」は、リーダー・メンバーは互いに協力し合おうと思うようになる変化であり、「リーダーシップ・メンバーシップをうまく機能させようという思いがより強くなる変化」ということができると思われる。このような変化は、「研究計画書の役割は、グループで研究を行う場合に、グループの合意形成のうえで大変重要である。研究計画書は、研究の意図や方法などに関して、研究者同士の共通認識や意思統一などを保証するものである¹⁰⁾」といわれているように、多くの場合、臨床での看護研究はグループで行うため、研究を進めていくうえで、適宜、研究のリーダーは研究メンバーと意見調整を図っていく必要があるが、この意見調整を図りながら研究を進めていくなかで、チームワークの重要性に気づくきっかけがあり、このような気づきをきっかけとして「チームワークに対する思い」に変化が生じるのではないかと考える。

「業務改善に対する思い」は、普段行っている仕事をよくしていこうと思うようになる変化であり、「ルーチンで行われている業務をより効果的・効率的にしていこうという思いがより強くなる変化」ということができると思われる。このような変化は、「看護研究に取り組む目的について3位までの優先順位をつけた回答を求めた結果、看護研究推進担当

者が認識する最も優先順位が高い目的はスタッフ教育であり、次に患者サービスの向上、業務改善であった¹¹⁾」といわれているように、臨床においては業務改善を目的とした研究が多いことにより、業務改善に関する研究によって業務改善に対する新たな知見や方法を見いだすことができたという体験が、現在行っているさまざまな業務の問題点に気づくきっかけとなり、このような気づきをきっかけとして「業務改善に対する思い」に変化が生じるのではないかと考える。

「自己研鑽に対する思い」は、もっと知識を得ようと思うようになる変化であり、「学んでいこうという思いがより強くなる変化」ということができると思われる。このような変化は、「研究者が、既存の研究の上に自らの研究を積み重ねていくためには、そのトピックに関してなにかすでに知られているかを理解することが不可欠である。文献の丁寧な検索が、新しい知識を積み上げる基盤となる¹²⁾」といわれているように、研究においては十分な文献検討を行うが、この文献検討が現在の自分の知識の曖昧さ・不十分さに気づくきっかけとなり、このような気づきをきっかけとして「自己研鑽に対する思い」に変化が生じるのではないかと考える。

2 「看護研究」体験前後での仕事の仕方における変化

表2と表4から明らかなように、「看護研究」体験前後での仕事の仕方における変化で看護師・病棟師長に共通していたカテゴリーは、「看護援助の仕方」「思考の仕方」「自己表現の仕方」「チームワークのはかり方」「仕事に対する取り組み姿勢」「自己研鑽の仕方」であった。

「看護援助の仕方」は、根拠を意識した看護援助がみられるようになる、研究結果を活かした看護援助がみられるようになるなど変化であり、「根拠に基づいた看護援助ができるようになる変化」ということができると思われる。このような変化は、「看護援助に対する思い」で述べたように看護研究とは深く追究して看護という現象の本質や真相をつかむことであるため、看護研究によって研究テーマについての本質や真相を明らかにしたという体験が、普段行っている看護援助の根拠の重要性に気づくきっかけとなり、この気づきを意識的に看護援助に活かしていくことで「看護援助の仕方」に変化が生じる

のではないかと考える。

「思考の仕方」は、焦点化して考えられるようになる、多角的に考えられるようになる、論理的に考えられるようになるなどの変化であり、「看護に対する考えに深まりと広がりが見られるようになる変化」ということができると思われる。このような変化は、「(看護研究の) 疑問を解く一番最初の段階は、初めに疑問として生じたことをよく吟味、分析して、その疑問をいくつかの要素に分けたり(細分化)、それらの要素の間にどんな関係があるのかを想定したり(構造化)して、疑問の焦点を絞ることである」¹³⁾、「研究プロセスは、まず、研究課題をはっきりさせるまでは、自分でその課題に関して過去の成果を調べたり、人に尋ねたり、あるいはそれらをもとにいろいろと頭の中で考えたりする『思考』の世界である」¹⁴⁾、「研究という手段によって知識を創り出す場合には、その知識を導き出すプロセスが筋道だっていなくてはならない」¹⁵⁾「考察は、得られた結果の概要を述べ、そのような結果が得られた理由や結果の意味を解釈していく部分である。他の文献との比較検討も行って結果の意味を十分吟味する」¹⁶⁾といわれているように、看護研究を行うさいは、研究内容を焦点化して研究テーマを決定する、研究計画を論理的に考える、考察においては多角的に検討を行うなど看護研究すべての過程において考えるという知的活動が必要となるため、このような知的活動を体験することによって「思考の仕方」に変化が生じるのではないかと考える。

「自己表現の仕方」は、自分の意見を伝えられるようになる、自分の意見を言うようになるなどの変化であり、「自分の意思を伝えられるようになる変化」ということができると思われる。このような変化は、「研究計画書の役割は、グループで研究を行う場合に、グループの合意形成のうえで大変重要である」¹⁷⁾、「(研究の焦点を絞るさいは) 頭のなかで考えをめぐらせるだけではなく、考えていることを書いてみるなど言語化して表現すること、そして周囲の人とテーマ周辺のディスカッションを大いにすることである」¹⁸⁾「研究の営みにとって、新しい知識の発見は当然重要であるが、その発見をいかに多くの看護専門家に伝え、実践に役立ててもらうかが大切である。そのためには、得られた結果をわかりやすく表現する工夫を身につけておく必要がある」¹⁹⁾といわれているように、看護研究を行うさいは、自分の

考えを言語化して他のメンバーと合意形成のために話し合う、研究結果をわかりやすく論文としてまとめる、研究結果をわかりやすく発表するということが必要になるため、このような体験によって表現力が鍛えられることで「自己表現の仕方」に変化が生じるのではないかと考える。

「チームワークのはかり方」は、リーダーシップ・メンバーシップが発揮されるようになる、スタッフ同士の関係がよくなるなどの変化であり、「チームワークが円滑に機能するようになる変化」ということができると思われる。このような変化は、「チームワークに対する思い」で述べたように多くの場合、臨床での看護研究はグループで行うため、適宜、研究のリーダーは研究メンバーと意見調整を図りながら研究を進めていく、研究メンバーが協力し合って研究を進めていくという体験によってチームで物事を達成することの重要性やチームで物事を達成するさいの方法がわかるようになり「チームワークのはかり方」に変化が生じるのではないかと考える。

「仕事に対する取り組み姿勢」は、仕事に積極的に取り組むようになる、仕事に自信を持つようになる、仕事に対する責任感がでてくるなどの変化であり、「看護師として仕事を行っていくうえでのコンピテンス(有能感)がみられるようになる変化」ということができると思われる。このような変化は、「コンピテンスに対する動機づけにより、これまでの学習に充足感を得ると同時に、自己効力感や自己責任性を強める」²⁰⁾といわれているように、看護研究を行い、研究成果が得られたという達成感や満足感はコンピテンスを強め、この強まったコンピテンスは、自己効力感を強めることによって「仕事に対する取り組み姿勢」に変化が生じるのではないかと考える。

「自己研鑽の仕方」は、知識を得るようになる、研修会や学習会に参加するようになるなどの変化であり、「自己学習行動がみられるようになる変化」ということができると思われる。このような変化は、「自己研鑽に対する思い」で述べたように研究においては十分な文献検討を行うが、このさいに知識の曖昧さ・不十分さに気づく、新たな知見に気づき知的好奇心が刺激される、また、研究メンバーと話し合うなかで知識の曖昧さ・不十分さに気づくという体験によって、自己の自己研鑽のあり方を振り返るきっかけとなり、この振り返りによって自己研鑽へ

の意欲が高まることで「自己研鑽の仕方」に変化が生じるのではないかと考える。

次に、看護師の仕事の仕方の変化にのみあったカテゴリーについてみていく。「患者・家族へのかかわり方」の変化は、患者の話を聞くようになる、患者の気持ちに配慮するようになるなどの変化であり、「患者・家族の思いを受けとめてかかわろうという行動がみられるようになる変化」ということができると思われる。このような変化は、「患者に対する思い」で述べたように、特に研究が患者・家族の意識・認識・認知などに関するものである場合に、文献検討段階、データ集約段階、論文作成段階など研究のあらゆる段階において今まで想像したことのない患者の思いに気づききっかけがあり、この気づきをきっかけとして患者・家族へのかかわり方を考えることによって「患者・家族へのかかわり方」に変化が生じるのではないかと考える。

Ⅶ 研究の限界と今後の課題

今回の研究は、「看護研究」を行う前後での比較における仕事に対する思い・仕事の仕方の変化であるが、「看護研究」体験後1年を経過した看護師を対象としているため、「看護研究」体験以外の体験も今回の結果に影響していることは否めない。また、今回の研究は、対象数が看護師38人、看護師長14人の結果からの見解であるため、今後も同様の調査を行い、見解の妥当性を高めていく必要がある。

Ⅷ 結論

「看護研究」前後での仕事に対する思い・仕事の仕方の側面から臨床看護師の行う「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化について以下のことが明らかになった。

- 1 看護研究を行った看護師が認識する「看護研究」体験前後での仕事に対する思いの変化については、「看護に対する思い」「看護援助に対する思い」「患者に対する思い」「チームワークに対する思い」「業務改善に対する思い」「自己研鑽に対する思い」などがある。
- 2 看護研究を行った看護師が認識する「看護研究」体験前後での仕事の仕方における変化については、「看護援助の仕方」「患者・家族へのかかわり方」「思考の仕方」「自己表現の仕方」「チームワークのはかり方」「仕事に対する取り組み姿勢」「自己研鑽の仕方」などがある。
- 3 看護研究を行なった看護師に対する病棟師長が認知する「看護研究」体験前後での仕事に対する思いの変化については、「看護に対する思い」がある。
- 4 看護研究を行った看護師に対する病棟師長が認知する「看護研究」体験前後での仕事の仕方における変化については、「看護援助の仕方」「思考の仕方」「自己表現の仕方」「チームワークのはかり方」「仕事に対する取り組み姿勢」「自己研鑽の仕方」がある。

引用・参考文献

- 1) 坂下玲子他. 中・大規模病院における看護研究に関する全国調査. 日本看護科学学会誌. Vol. 33, No.1, 2013, p.92.
- 2) 大村由紀美他. 大学病院看護師への看護研究支援の実態と必要な支援体制. Nursing Care Reserch. Vol. 13, No.3, 2014.
- 3) 奥山真由美他. 看護研究支援に対する看護管理者のニーズ. 山陽看護学研究会誌. Vol. 2, No.1, 2012.
- 4) 中野宏恵他. 臨床現場における看護研究の実施にともなう看護師の体験. 兵庫県立大学看護学部地域ケア開発研究所紀要. Vol. 21, 2014.
- 5) 佐藤麻貴他. A 病院における看護研究推進へ向けた教育のあり方の検討. 通信医学, Vol. 65, No.3, 2013.
- 6) 東洋他編集. 心理用語の基礎知識「潜在学習」. 有斐閣ブック. 2009, p.130.
- 7) 小笠原知枝他編集. これからの看護研究 -基礎と応用-. ヌーベルヒロカワ. 2010, p.22.
- 8) 南裕子編集. 看護における研究. 日本看護協会出版会,
- 9) 前掲8), p.15.
- 10) 前掲8), p.107-108.
- 11) 前掲1) p.93.
- 12) 近藤潤子監訳: 看護研究 原理と方法, 医学書院, 1994, p.27.
- 13) 数間恵子他編著: 看護研究のすすめ方 読み方 つかい方, 日本看護協会出版会, 2008, p.5.
- 14) 前掲13), p.23.
- 15) 前掲13), p. 7
- 16) 前掲13), p.84.
- 17) 前掲8), p.107-108.
- 18) 黒田裕子著. 看護研究, 医学書院, 2014, p.29.
- 19) 前掲8), p.196.
- 20) 新井邦二郎編著. 教室の動機づけの理論と実践. 金子書房, 1995, p.31.